

## 解説 22 見なれた光景を問い直そう：音楽室を通して考える

### 【課題のねらい】

音楽室の光景を問い直すというこの課題には、1) 身近な物や事の歴史的・社会的・文化的背景を知った上でその物や事の意味を自分なりに考える、2) 学問的に探求する道筋のひとつを経験する、という2つのねらいがあります。

### 【解説】

「音楽室がこんなふうだったら素敵なのに」と思ったことはありませんか。私たちは日常生活の中で「どうしてこうなのだろう」と疑問に思ったり（問いのタネ）、「こうすれば良いのに」と思ったり（問いの解決）することがたくさんあります。この課題では、こうした身近な「問いのタネ」から探求を深め、ある程度客観的で学問的根拠のある「問いの解決」（未来の音楽室への提言）に至るまでを経験してみました。

まずはじめは、音楽室の光景がどういうものであるかをきちんと認識すること、つまり身近な音楽室の調査です。調査といっても、物の数を数えたり大きさを測ったりするだけでなく、そこにかかわる人の行為を書き記し、一步踏み込んで人の思いも書いてみました。ひとくちに「きちんと認識する」と言っても色々なやり方がありますが、ここでは人の行為や思いを含めたさまざまな面から見ることで、生き生きとした音楽室をとらえることができたのではないのでしょうか。

次に比較をしました。一步さがって比較することで、「当たり前」と思っていたことが実はそうではないと気づいたり、今まで見えなかった問題点が見えてきたりします。いろいろなことに気づき、いろいろなものが見えて来る過程で、先人の研究によって「すでにわかっていること」「明らかにされていること」を知っておくことも大事です。これを踏まえなければ、いくらよいことを言っても単なる主観的な意見や感想にとどまってしまう。五線譜やピアノについての疑問や、学校音楽教育の歴史についての疑問は、その多くが本を読むことで解決できます（比較的読みやすい参考文献を文末にあげておきました）。ここまでの過程をきちんと踏まえて書かれた「未来の音楽室への提言」は、もはや単なる意見や感想ではなくなっているはずで

この課題を終えた時点で、自分を取り巻く音楽文化や自分が受けて来た教育に対する見方や考え方になんらかの変化が生じたとしたら、さらに大きな問題意識へと発展させることもできるでしょう。あなたの中に何か新しい問いが浮かび上がって来たとしたら、ぜひその問いに継続的に向き合ってください。

片桐功ほか著（2009）『増補改訂版 はじめての音楽史—古代ギリシアの音楽から日本の現代音楽まで』音楽之友社

渡辺裕著（2010）『歌う国民—唱歌、校歌、うたごえ』中公新書